

魔斬姫伝之

小説 綾守竜樹

挿絵 このき奈緒

立ち読み版

前巻続き 第3章 積み沸し(上)

第4章 積み沸し(下)

第5章 鍛錬

第6章 火造り

登場人物紹介

Characters



たかしろ やくも
鷹城 八雲

日本を古来よりオカルト的に守護してきた組織・「神器省」に所属する退魔師。人知れず魔を狩る役目を負う斬魔刀使い。淫魔に陵辱された過去を持つ。

みつぎ しのぶ
御剣 忍

神器省剣課課長。八雲の上司。名家の令嬢にして「かざかぐら風神楽」の異名を持つ斬魔刀使いだが、デューク=シャドウ淫影の魔公爵の牝奴隷となっている。

おがさわら みき
小笠原 美貴

神器省所属の斬魔刀使い。忍と同じく、デューク=シャドウ淫影の魔公爵にその身を捧げる。

デューク=シャドウ
淫影の魔公爵

淫魔。女の精を吸いとり、自らの力とする。

【前巻続き 第3章 積み沸し（上）】

次の作業は板付け（かりづけ）です。板付けとはほぼ鋼が沸いたと判断されたときに鋼を外にとりだし、数回大槌でそっと叩いて様子を見ることをいいます。もし沸しが良好ならば積まれた鋼は叩かれても崩れ落ちたりすることはありません。この状態を見極めたうえで続いてホドの中へ鋼をもどし、大吹きをかけます。

鈴木卓夫『作刀の伝統技法』理工学社、一九九四年

「……殺すっ！」

跳躍のかたちで落下した。赤い鉢巻をたなびかせながら、凌辱魔に斬りかかった。全身を包む念装甲膜あかいろうおどしが、風に撫でられて輝いている。溜めこんだ復讐心を噴きだし、はちきれんばかりの曲線にうつすらと炎念ほのおをまとわりつかせている。

「なかなか可愛いプロポーズじゃないか、鷹城八雲たかしろうやくも」

淫魔シャドウが、手首から先のない左腕をかけた。肩口のあたりから切れ目にかけて内なる爆発を走らせ、腕ぜんたいを紫色の肉塊と化した。千切れた手首を8つに裂き、ヤマタノオロチが牝豹を捕まえるかのように襲いかからせた。

「意地っぱりなマゾ牝は、やはり手なづけ甲斐があるな！」

八雲は、かまわず飛びこんだ。宙に作られた肉の檻を焼ききり、障子をぶち破るように着地。陣羽織ではとても隠しきれない双乳をぬたくらせ、バネのように立ちあがる。斬魔刀の切っ先は当然、シャドウの胸に向けている。

「念炎の鎧か……その美肉を再び味わうには」口笛を吹きそうな声で呟きながら、後方にジャンプ。「恨みの皮を剥ぎ、負けん気の筋を切り……そして、プライドの臭みを抜かなくてはならんわけだ」

「再び、などと言うなっ！」

膝が伸びきる直前、転倒と同じ所作で倒れこむ。頭が腰より低くなったところで爪先をキック。陸上競技のスタートよろしく飛びだして、シャドウの横を取った。アッパーじみた斬撃を喰らわせると見せかけて腰を沈め、床に片手をつけて回し蹴り。上手いぐあいに虚を突けた。ロングブーツの爪先で左臍を焼ききった。

むっちりとした尻たぶに筋肉のたくましさをみながら起立。鬼哭丸をコンバットIIグリップにして突きあげる。股当のストラップが、Tバックのように食いこんでくる。「……う、ぐっ！」

少しかわされたが、捻りこみまで付けて腋窩にお見舞いできた。ジャケットの右肩に刀の帽子を食いこませ、殴るように貫く。淫魔の右腕を、付け根から千切る。

「ま、マゾ牝の誘い受けにしては……」少しだけ流れた女体に向けて、シャドウが異形の左足を振りあげてきた。「おイタがすぎるぞ！」

八雲はミートポイントを予測し、銀の腰当に導いた。奥歯を噛んで腹筋を固め、札板ぎらいろの隙間から覗く真つ赤な曲面に腹筋を浮きあがらせた。

衝撃。本気を出したモンスターの一撃は、バイクにはねられるのと変わりない。多面体すぎるサッカーボールとなつて、壁際まで吹っ飛ばされる。重心をずらしながら念を放ち、壁を床に変えた。プラスチックの碎ける音——ポスターサイズの緊縛写真を踏んでいた。

眼鏡の似合う和風美人、凄すぎる絶頂に泣きじやくるの図。

御剣忍みつるぎしのぶ、理解のある上司が激写されている。紅雉姫くさなぎの指揮官でありながら淫魔の牝奴隷に堕ちた裏切り者は、「パイパン」にされた下腹部をてからせながら、コシの強い黒髪を宙に舞わせている。インテリ臭い眼鏡を鼻に引っかけ、大口を開けて叫んでいる。

忍っ、おま×こを犯されてイクうつ！ お×んこイクツ、おま×こ凄いい！ お×んこ、おま×こ気持ちいいのお！ ああ、セックスつて最高お！

「……………やかましい」

「何だ？ ……幻聴でも聞こえたのか？」

八雲はハツとなつて、下唇を噛んだ。しつかりしろ。胸の奥で気力のネジを締めあげる。気を散らすな、余計なことを考えるな。いまの私は殺戮機械キリングマシン、戦いに専念するんだ。

「先回りしただけだ」

シャドウは損傷の軽微な左手を再生させながら、

「……………やかましきでいったら」意味深な沈黙と目線。「それの方が重罪だぞ。爆音が聞こ

えてきそうだ」

「……………」

「そこまで弾むと、ある意味技だな。頂きから角まで出すし……芸達者な双娘だ」

「……鑑賞料金は、高いからな」

90度ちがう世界に立ちながら斬魔刀を構える。

「そうなのか？ では、こちらも芸を見せようか……」手負いの淫魔は、右肩から紫色の肉塊をこぼした。「このまえはニンゲン界で覚えたものばかりだったが……今回は人外のふふふ、淫獄仕込みの芸だ」

また、こぼれた。ポトリ、ポトリ。斬られた肉片にしては大きすぎた。

「おまえのような触手好きには、嬉し泣きしてもらえると確信しているぞ」

「勝手にしてろ……！」

跳躍。直角の位置から、跳躍に落下を掛けて襲いかかる。踏みつけていた額縁が、八雲の念から解かれて床に落ちる。M字開脚で絶頂中の写真^{しのぶ}。舌を突きだしているアクメ顔が割れるよりも早く、CQBレンジに入る。鬼哭丸を逆手に変えて斬りかかる直前、肉塊たちにはジャマされた。

シャドウがこぼしていたのは、異形のコブヒトデだった。

全部で7匹、ヤツの血と同じ毒々しい紫色である。幅長は20センチ、野球のグローブくらいだ。5本の腕と丸みのある本体には、円錐形の瘤^{こぶ}が並んでいる。くると翻って腹側

をさらしたヤツは、真っ赤な疣いぼと真っ青な吸盤の点描主義を見せていた。曲線的にのたうつ5本腕の中心、肉盤のまんなかでは盃盃くらい「口」が、粘液の涎を垂らしていた。

八雲はかまわず突撃した。いくら跳びかかってくるところで、紅あかめた念装ねんそう甲膜こうまくが遮まつてくれる。毒々しいモンスターたちは念炎ねんえんによって騒々しく焼けただけ、鼻の粘膜を痺しびらせるような匂いを振りまくにちがいない。

「……戦の本質において、防御力など存在しない」シャドウの声には、忍び笑いが混じっていた。「あるのは抑止力だけだ……戦後の邦人は、すっかり忘れてるようだが」

ヒトデの化け物たちは、炎念に引つかからなかった。

「……………ッ！」

慌てて振りはらったが、捌ききれず脇腹に貼りつかれる。

「俺は、おまえの精を美味しくいただいてるんだぞ？」

八雲はいったん襲撃を諦め、下唇を噛みながら距離を取った。陣羽織じんうぎごしにしがみついていた1匹を剥がし、鬼哭丸を突きたてた。

モンスターは海に棲む生物のように、あちこちをくねらせて断末魔を表現する。本物のヒトデと同様、硬さやかたちまで激変させる。ザラザラして骨っぽくなったかと思えば粘膜のドロドロ感を漲らせ、スチールたわしと巨大な舌のあいだを瞬時に行き来する。

「そいつらは、おまえの精を使って創つりだした下僕フットマンだ……時代がかった用語を使えば、式神しきんといったところかな」

ヒトデもどきの正体を教えられて、八雲は斬魔刀を握りしめた。

「精と念……原油とガソリンの関係、とても言えはいいのか？ 共食いはできないさ。もちろん、斬魔刀に刻まれたら終わりだが」シャドウは苦笑しつつ、「おまえたち女の退魔師は、一度でも犯されたらアウトなんだよ……俺たちとの一夜を忘れられなくなるだけでなく、こうして抗体を造られてしまうんだ」

淫魔が、肩口から新たな触手を吐きだしてくる。ズルズルと8本、紫色の蛇腹に吸盤つきの手。八雲の美身に吸精絶頂を教えこんだ凶器たちだ。

「我が下僕たちは、主人の言葉でさえわからぬ下等生物だが……運動能力は高いぞ。それに、とても貪欲だ」

紅薙姫は、刀の柄を碎かんばかりに握りしめた。大きく跳んで壁に念着した。

さつきとはちがう額縁を踏み、ドッグスタイルで絶頂中の忍をグシャグシャにした。さらに天井に向かって跳び、シャンデリアに念着。そこでやつと、陣羽織の穴に気づいた。化け物ヒトデたちは、どうやら溶解液も吐きだせるらしい。

「おいおい、何てことをしてくるんだ……おまえが壊したヤツは、忍が初めてアナルフアックを極めたときの記念写真なんだぞ」

どうする？

「忍が淫獄館に泊まるときは、それを鑑賞しながらアナルⅡオナニーで3回イクことを命じてあったのに……」

6匹もいる別働隊ヒトデと本体シヤドウから、あちこち自己主張の強い女身を守りつつ打撃をしかけるのは不可能だ。攻めるなら、攻められるのを覚悟しなければいけない。肉を斬らせて骨を断つ以外にない。

こちらの念炎ぼうえんが効かない以上、あのヒトデたちにとつて、自分はウエットスーツを着ているだけと同じである。女体のどこかに貼りつかれたら、骨のない生き物ならではの動きで揉まれるだろう――。

(……………)

それがどうした？ そのようなことぐらいで、自分は感じたり、ちがう、集中力を途切れさせたりしない。揺るがない、揺らされない。

むしろ、これはチャンスだ。

ヤツらを産みだすにあたって、シヤドウは溜めこんでいた精エネルギを吐きだした。いまのヤツは回復力、再生力ともに衰えている。いまなら押しきれる。ヤツが臭い触手を生やして元に戻るより先に、致命傷を与えられる。

「……深山おぐやまの淫ひんらが魔も斬分けて」八雲は虫食い部分を切り、陣羽織の裾を詰めた。全身の紅さをより露あわにしてから、「道みちある世よぞと女むすめに知らせん！」

ありつたけの力を込めて跳躍。軽自動車なみの重量があるシャンデリアを揺らして、口ウソクの雨を降らせた。淫魔の頭上を追いこし、その背後に着地。勢いのあまり赤ジュウタンが靴のかたちにえぐれ、たわわすぎる双乳がサンドバッグの迫力で揺れる。大理石の

床にヒビを走らせながら横つとびして、まず別働隊を斬りつけた。斬れなかったぶんはかわし、返す刀で凌辱魔の背後を狙った。シャドウは振りむいただけで逃げず、触手を広げて「盾」にしてきた。

八雲はかまわず突進し、鬼哭丸で肉の障害をブチ抜く。6枚、7枚めで少し切っ先をぶらされたが、力まかせに押しきる。魔性の体液と、ようやく降ってきた真つ赤な蠟雨を浴びた。視界の端を生きのこりのヒトデがかすめた。1匹、いや、2匹？ どちらにせよまっている暇はない。8枚めも突破して、驚くシャドウの鳩尾みぞおちに飛びこんだ。両手握りの鬼哭丸で、横隔膜のあたりを突きあげた。

(……奪った！)

一気に押しこもうとした両手が、シャドウの左手に止められる。剣の半ばまで刺しておたがいの息を吸ったところで、命懸けの押しあいとなった。

「ま……まさか……」シャドウの口調から、初めて余裕が消えていた。「……す、捨て身で……しかけてくるとはな……」

唇の端から吐血。ちょうど八雲の左頬に滴り、目元のホクロを紫で覆った。

「……おまえの助言に」八雲も力み、震えている。「従わせて……もらったんだ……」

刀を持つ両手と血だらけの右手、中腰の八雲と猫背の淫魔が、たがいに渾身の力をぶつけあい続ける。両者とも馬鹿正直に押しあうだけでなく、反らしたり捻ったり、と変化を付けて刺決トドメもしくは回避を謀っているのだが、ヘタに色気を見せたら持つていかれそう

動けない。奥歯の軋みを輪唱し続けるしかない。

（しかし……）八雲は顔面筋のしたで、そつとほくそ笑んだ。（……私の勝ちだ！）

こうして迫りあいを続けるだけで、シヤドウにはダメージとなる。自分はただ、綻びを待っているだけでいい。注意すべきは気の緩みとアドレナリンの量ぐらいだ。暴走気味の昂奮を鎮め、持久戦用に切りかえて――。

「……………うっ？」

足首に曲線的な重みがまとわりついてきた。

斬りのこした別働隊だつた。母なる精を求めて自律稼働中の2匹は、左右のロンググーツを越えて股間に向かい、股当のうえで悪戦苦闘。諦めて脇腹を這いあがってくる。そして恐れていた通り、

「……………て、定位置……………かな」

揉まれやすい部位に陣取つた。八雲は2匹に双乳をすつぽりと覆われ、ヤツらの体重分だけ垂らされていた。まるで、悪趣味なビキニを着せられているようだった。

「……………ふふふ……………こいつらに……………私を助けようとする……………知能はない……………か……………」
と、淫魔。唇を引きむすぶ紅雛姫を見やり、「ガマン比べ……………だな？ 私……………苦しみのあまり……………この突きを抑えられなくなるか……………それとも、おまえが……………」

感じるあまり、鬼哭丸に力をこめられなくなるか。

「……………」

怨みを貫きとおせるのか、それとも快感に手なずけられてしまうのか。自分の復讐心はシャドウの忍耐力を凌駕しているか。自分のなかに巣くう「女」を退けて、「女人ノ姿ヲ取りタル刀」のまままでいられるだろうか。

「……誰が感じたりするか」

「そうか……こちらは、めいっばい……」血まみれの唇に、三角の笑い。「感じさせてもらっているぞ……この痛み……ふ、ふふふ……マイナス百倍にして返してやる……」

逆襲の誓いを合図としていたかのように、2匹の星がその身をくねらせ始める。

「……………ッ！」八雲は、奥歯を噛みしめた。「……ん……………」

念装甲膜のおかげで、棘皮動物きよくひならではの触感さふは和らげられている。だが、のたうつ5本の腕は人間の指よりネットリと、舌より力強く、乳肉に食いこんでくる。計算された無遠慮さで、たわわな量感を乳頭に送りこんでくる。1週間前から瘡じこりの取れない頭頂部が、肉盤の腹にべっちやりと密着させられて、疣と吸盤の蠢きを滲みこまされる。

「どうした……まだ、あいさつでさええないぞ？」

「うるさい……」

「ふふふ……おまえの双娘には、シャボン玉の忍耐力しかないものな……さらに、自分たちだけでもご主人様を極楽に案内できる孝行娘だも」

八雲は答えず、少しだけ刀を捻った。途端にシャドウが嘲弄を喋つづみ、片眉を曇らせた。ざまあみろ。わずかな攻撃でもてきめんに効いてしまうのは同じ——。



「……ちがう！ わ、私はちがう……私には、効いてなど……」

気を引きしめる女戦士を嘲笑うように、ヒトデたちが「よろしくお願いします」と語りかけてくる。私どもも、先輩のご活躍に負けぬ業績を残したいと思います。人間には決してできないアクロバティックな揉みこみを、人間にしかわからない確さでくり出していく。念膜と粘膜がぶつかって、濡れた擦過音を奏でます。

「……う……ッ……ん、く……」

双乳。

あごのした、両肘のあいだにぶらさがっている果実は、いつだって八雲の意識に居座っている。首にかかる重みやアクション時の振幅として、地味に集中力を削っている。生まれつきワガママな存在感が、揉み責めに合わせて膨張をくり返す。

「やるせないハンデだな」シャドウの言葉尻に含み笑いが浮かんだ。「ふふつ、ヘタに攻撃をしかけるより……乳責めの方が確実なのかもしれない……」

八雲は朱く染まりだした頬を引きつらせ、犬歯を剥きだした。眉根を寄せ、胸から肩甲骨へと抜ける痺れを噛みこらす。肩や肘の震えを殺し続ける。

「どうした？ ……さあ、もつと力を入れるよ……あと一息なんだぞ……？」

「そちらこそ……」舌による挑発は、手詰まりゆえの神経戦だ。どちらにとっても瀬戸際のはずだ。「さっさと……押しかえしたらどうだ？ それとも……最近の淫魔は……切腹が趣味なのか」

「いや……ただ、酔いかけていてな」

「痛みに？」

「匂いに」光の差さない瞳を回転させて、「気づいてないのか？ おまえの首筋から、あの夜と同じ匂いが漂ってくるんだ……くわえて、目の前で弄ばれているだろ？ それを揉み狂わせたときの感触が、脳裏を過ぎるんだよ」

「……………」

「きめ細やかな肌が、匂う汗を吸って……」

しつとりと潤んでいた。乳肉には、桃果のようにネットリとした弾力があつた。さらにデカいだけの巨乳とちがい、しなやかな歯応えも味わえたな。元軍人の紅羅姫、生粋の女戦士だけが潜ませている筋肉の移り香だ。牡の指を受けいれつつも拒み、いじらしさを滲ませながら包みこんでくる。この手で揉みほぐしている、この私が蕩けさせている、と強く実感できた。征服欲を堪能させてくれる逸品だっ

「……黙ってる」

「たな？ そうそう、乳頭の歪いびつさも忘れられない。欲情すると急に痲おぼつて……」

聴覚は閉ざせない。どうしても聞こえる、淫魔の言葉が入ってくる。

共犯者らしい馴れ馴れしさが、八雲の脳裏に墨染めのシーツを思いうかばせる。キングサイズのベッドを、高級志向のラブホテルめいた部屋を連想させる。

天井のシャンデリアが夢のように揺れ、ほの暗い記憶の部屋が突然、富実樹海の暗がり

に切りかわった。ポイントA E G マーク〇五六、3年前の地獄に繋がった。一歩めで黄色い花たちの匂いに迎えられ、二歩めで軍服を引きさかれた。恐怖を味わうより先に犯され、悲鳴をあげるまえに喘がせられた。初めてセックスの最中に号泣させられた――。

「黙ってる！ いちいち思ったださ……」
しまった。

「人間の脳は、一度刻まれた痕を消せない」してやったりの顔。「言っただろう、女の退魔師は一度でも犯されたらアウトだ、と」

「……」
「いま思っただしていろいろ？ 3年ぶりの、3年前の……女心地を反芻しているだろう？ じわじわと……望んでいなくても……たとえいやでも」

「……」
「あの夜を止められまい？ 意識しまいとすればするほど、かえって思っただしてしまいうものだからな。それに」饒舌を切り、ヒトデたちを凝視して、「どうやら……我が下僕たちも啜り泣きを聞きおえたようだ。これからは攻略的な折檻になるだろう」

魔性の十本指が、これまでにない強さで鷲づかんできた。

「うぁ……！」

心臓を握りつぶされ、溜まっていた血を一気に搾りだされた。熱をともなった脈動が首筋を駆けあがり、こめかみを膨らませる。獐猛な疼きが頭のとっぺんあたりから抜けてい

くのと引きかえに、視界がぐらりと揺らいだ。

「……いかがなされました、復讐のお姫様？」

シャドウは、本当に嫌みなヤツだった。

「……………ッ……………う……………あ……………く……………」

「おや、肘や肩が震えていますよ？ 吐く息も荒いですし、鉢鉄はちがねのしたから汗が……」

ヒトデたちが、詰め将棋の確実さで追いこんでくる。もつとも遠慮したい戦法を使われ、思わず地団駄踏みたくなる巧みさで揉まれる。揺すられる、縊くびりだされる。捏いじねられ、弄いじられ、寵いづくまれる。

「……それに、顔色がとても」嘔えずき声になって、「いやらしいですよ、八雲姫？」

「う……………う……………るさ……………い……………」

「ふふふ、姫はこの揉まれ方が大好きなのですよね」

「……………うる……………さ……………」

これは命懸けの戦闘だ。

負けたら淫魔の慰み者、ヌードモデルの日々である。壁に飾られた女たちのように、輝くばかりのアクメ顔を額縁に封じられる。さらには自分のポルノを見ながらオナニーさせられて、その痴態まで重ね撮りされるらしい。セックスと激写の爛れたりサイクルが行きつく先は——。

御剣忍。

「……あー……そ、そんな……ツク……ああー……」

振動の強さだけなら、緑ペニスのほうが激しい。しかしこの悦びに比べれば、あれは最適値を造りだせないがゆえの力押しだった、と思いらされる。女性器は、やはり男性器の震えに合わせられている。このリズムと強さを欲している、これにこそ狂わされる。

「……あひい、いい……キモチいい……イッチャう……あー……も……もれるう……」

子宮がゴポゴポと喚いている。詰め物感たつぷりにのたうっている。洋ナシの器からあぶれた精液が、子宮孔を逆に舐めおろしてくる。脳の深いところを掻きむしられているような狂おしさ。膣まで流れだしてきたことで改めて、火傷の熱さに泣かされる。冷めない魔力は性器どうしの密着にムリやり入りこみ、ペニスを縁取るみたいに滲みだしてくる。ビュクビュクとあふれ続け、血の池に真つ白な花を咲かせる。

「……おねがい、おわってえ……ツク……もう……もう……と、とまってえ……」

「おやおや、まだ3分も経っていませんよ？ 八雲はセックスの優等生ですが、まだ私の味を覚えるまでにはいかないでしょう」

「……あうう、ふぐうう……」 齒の隙間から漏れる吐息が、絶望的に粘っこい。「お、おぼえた……ツク……おぼえたからあ……あああ、もう……もう、あなたのコレえ……わすれられないからあ！」

「嬉しいですね。ちなみに、忍さんのときは7時間続けましたよ」

もう泣くしかなかった。

「ああ、熱い、あついのお……おなかの奥があ……いく……イクイクイク……うう、まだ上がってる……どんどんキモチよくなっちゃう……」

「もつと上昇しますよ。熱さや振動を感じられるうちは、まだ限界ではありませんから」
「……ゆるしてえ……あそこがあ、いっぱい……おなが、やぶけちゃうのお……」

射精が止まらないように、涎と涙も垂れつばなしで止まらない。赤いローションのせいでやたらと映える白濁も増え続け、股間のあたりから臭う領土を広げてくる。そのうち粘液溜まりそのものが変色させられ、血の池はザーメン風呂と化するだろう。7時間も耐えたという忍は、腰まで浸かったのだろうか。シャドウが宣告した通り、男の臭いを滲みこまされたにちがいない。

「そうそう、私は射精しながら抜き差しできるんですよ……肉襞の隙間にも、隈なく漏れなく精液を擦りこんであげますからね……」

私はどうして女に生まれてしまったのですか。

「5分保たなくなりましたね」

叩きおこされるのは、これで16回目だった。

「……あー……いく……うー……あうう……イクイクイク……」

あれから側位、後背位と続けられ、ボディタイツも破かれた。背面座位、騎乗位の上下

揺れでバレッタを飛ばされ、落ち武者へアにされた。汁まみれの肉人形としてあらゆる体位を試され、気が付いたら対面座位だった。床がウォーターベッドのように波打つのを使って、恥骨が軋むほど突きあげられていた。

もちろん、射精も続いていた。

亀頭は延々と蠢き続け、粘膜たちを掻きまぜてくる。子宮孔が削られて、直径を広げられている気がする。精液は煮詰めたばかりのコンデンスミルクで、いつまでたっても居座り続けた。満腹感を拭えなかつた。

「……イク……あー、イクー……うう、あぐ……ふぐうー……」

首からうえを吹きとばされているような絶頂感に耐えられず、八雲はシャドウの胸にしがみつく。その背に爪を立て、せめてもの支えを得ようと引っかきまくる。いまや女戦士が仇敵に与えられるダメージは、ベッドの武勲とも言える傷痕だけだった。

「そろそろ、私を覚えていただけたと思うのですが……」

シャドウが小さく指を鳴らすと、光源が1つ消えた。残ったのは、ちょうど八雲の真正面で輝いているものだった。牢獄の半分が暗くなつたかと思うと、穴の奥から青みがかつた炎が噴きだしてきた。ガス燈を思わせるそれが、さきほどまでとは比べモノにならない熱と光を放ってきた。

あふれた精液のせいで「ヨーグルト沼」と化している床面に、2人の姿が照らしだされる。宙に座り、両腕両足を使って円柱らしきものにしがみついている牝身を映し出す。

女の影だけ。

男のそれは映っておらず、八雲は空中浮遊しているようだった。シャドウは異様に黒々とした像をじっくりと検分して、

「上出来です……では、八雲の影をいただきますよう」

「……うあ……あああー……あー？ ああ、いやあ、やあ……」

八雲は両肘をつかまれ、ムリやり万歳させられた。全身が弛緩しきっているのに、頭の重さに負けてだらりとのけ反らされる。あいかわらず中だしされ続けながら、斜め懸垂のポーズを取らされる。ガクガク揺れる視界が、「壁」の変化を捉えた。

シャドウの命令通りに動く肉壁から、無数の「鹿威し」が突きでてくる。媚薬ローションの注ぎ口だった彼らは、その先端に二度と出会いたくない相手を融合させていた。

「入浴初回で『淫影』を執るのは、初めてですが……あなたのように強靱なマゾ牝なら、狂わずともすむはずです」

あのヒトデたちだ。サイズは2回りほど小さくなっているが、触腕のいやらしい動き、赤い疣に青い吸盤、まんなかで蠢いている「口」、どれもこれも双乳の絶頂を思いださせ、クリトリスを疼かせる。

「……死んじゃう……わたしい、キモチよすぎて死んじゃう……」

もう10以上の数をカウントできる自信がないのはつきりしないけれど、おそらく30本近くある。これだけたくさんの「口」を使う責めといえは、ああ！

吸精絶頂だ。

自分の中身を目減りさせられ、快楽と入れかえられる。これまでの「注ぎこまれる快楽」に「吸いだされる悦楽」を掛けあわせて、桁外れの値を弾きだすつもりらしい。

「だいじょうぶだと思えますよ。それに……」喉の奥で笑いながら、「心のどこかでは、それでもいいと思っっているでしょう？ 人間には耐えきれない絶頂、究極の快楽を貪りながらイキ死ぬ」

「……………い、いやあ……………わたしい、そんなの……………そんなのお……………」

「生そのものを燃やしつくすほど牝になる……………マゾにとっては最高の散華ですよね？」

「……………あああ、ああ……………うう、うあああ……………」

痙攣しつばなしの全身が、吸精の触手たちに集^{たか}まれる。両耳、うなじ、首筋、両脇。あのヌメらかなザラつきに握りしめられて、我知らず腰を振る。胸には左右それぞれ4本ずつ。乳房を3方向から驚つかまれ、さらに乳頭をくわえられる。双娘たちは、もう完璧に調教されきっている。背中、脇腹、ヘソ、尻たぶ、恥丘。ごめんなさい。クリトリス、小陰唇、大陰唇。ごめんなさい、ゆるしてください。内腿、膝裏、足の指——。

「……………い、いく……………ふぎい、イク……………イクイク、くひい、イグう……………」

まるで博士のスイッチを待っているフランケンシュタインだった。1本の男根と無数の触手に繋がれて、紅薙姫は性の実験動物に堕ちていた。

「さあ、あなたの影をよこしなさい！」



ひととき強くベッドを揺らされ、喉まで届きそうなくらい突きあげられる。満杯の子宮に新たな精液を注入される。子宮の身震いと歩調を合わせて、ヒトデたちが揉みだした。無数の「口」が尿管から尿孔までのあらゆる穴にバキュームをかけ、生命の根源となるエネルギーを吸いとった。

「……あああああああああああああああああああああーっ！」

それは最後の火花だった。

「……ツク！ ま、またイクツ！ ひいつ、イッチャう！ い、イクイクツ！」

精液を詰められ、精を抜かれる。向きはべつでも絶対値は等しい恍惚に引きさかれて、その破れ目から「自分」がこぼれ落ちる。存在そのものを一方通行に繋げられて、自分は子宮を核にした循環路にすぎないのだと悟らされる。いや、ただの通り道なのかもしれない。男の征服欲に蹂躪されるだけ。はるかに高くて底なしに深いところへイッた「私」は、二度と帰ってこない。

イク。

この館に来てから、いったい何度イッたのだろうか？ 発狂しそうなのに、まだイケる。死にそうなのに、まだまだイッてしまう。やめて、ゆるすると喚きながらも、結局のところは内なる牝に身を乗つとられる。

「ああっ、あーっ！ あああーっ！」

乳首がイク。クリトリスが昇る。尻たぶが翔び、女性器が散る。全身が光の泡と化して

プチ、プチと弾けていく。徹底的に「牝」となることで女から解脱している。この桃源郷においては胸の大きさなど関係ない、紅雉姫の誇りもレイプの屈辱もどうでもいいのだ。いまの私はいかなるときよりも、自由だ――。

「……おく宮の「朗々たる声だった。「おどろが穴も吸いとりて、我棲む影と女ひとに知らせむ」薄れかけていく視界の端で、八雲は自分の影が消えるのを見た。尻たぶを舐めまわすほど溜まった精液の海原が白一色になり、間髪入れず男の像を映し出した。

身も心も、そして影も淫魔に貪られてしまったのだ。

「……あはアああアああアはああア！」

だから「シャドウ」という名前なのか。場違いすぎる得心が、力まかせに振りおろされた戦斧のように意識を断ちきった。

真つ赤な疣と真つ青な吸盤、視神経に負荷がかかりそうなほどの粘膜絵図。要するに、例のヒトデを巨大化させたものだ。ヌチャヌチュ、プチョプチャ、粘りの怨みが聞こえてくる。一生鼻にこびりつきそうなムスク臭がする。

「両手を頭のうえに置きなさい」

八雲はのろのろと肘をあげ、肩輪のガーネットをきらめかせた。

「お望みどおり、そのいやらしい双乳をもつといやらしくしてあげますからね……」

淫魔がボトルを握り、ラッパである。放心しきっている女の顔をつかんで、

「……あう……ううう……んむっ？」喰いちぎられそうなキスだった。深々と舌を突きさされ、ウイスキーを口移しされた。「むうっ、むむ！ んむむ……」

口いっぱい溜めていたらしく、ロシアのアル中でも音をあげる量だった。熱、香り、さらに酩酊感が爆発して、内臓の奥から火達磨にさせられた。飲みきれなかったぶんが喉を伝い、琥珀色の筋を引く。真珠と銀のネックレスを芳香つきでてからせる。目尻が蕩けおちる様子をまさに眼前で見極められつつ、ヒトデを閉じられた。

「……………ッ！」

上半身を男の胸板に抱きしめられる。文字通り、体内に埋めこまれる。鎖骨や肋骨の腕をガツチリ、と首や腋にも回される。まるでハエジゴクに喰われる虫だった。ルビーの帽子しか被っていない双娘たちが、魔性の愛撫に包みこまれる。

谷間も付け根も関係ない、鎖骨のくぼみや腋窩だって逃げられはしない。何万という色

事師たちから、いつせいに揉みしだかれる。舐りまくられ、吸いつくされる。どの疣や吸盤も、双乳の弱みを知悉ちしつしている。八雲は両眼を睜り、心臓を一突きされたかのように頤を跳ねあげた。熱い接吻を振りほどき、火を近づけたら燃えあがりそうな声で絶叫した。

「……あーっ！」

両手を頭のうえから落とし、だらりと垂らす。立ち膝どころか背筋を伸ばしたままでいることさえできず、尻たぶまで落としてしまう。骨のある無脊椎動物になりかけて、生きた驚づかみに阻まれた。

「ああっ、あああつ！ い、イクッ！」

このヌメらかなザラつき、不定形の揉みこみ。肌の毛穴を開かされ、淫靡な粘液を擦りこまれる。脂肪を好き勝手に選りわけられ、あちこちに送りこまれる。下乳に押しこまれれば量感のボディブローとなり、乳頭に押しやられれば乳首が突きわめく。粘膜の快感に不足しがちな炸裂感、吸盤がフオローする。あまりの快楽に胸が窒息しかけたら、腋窩を舌でえぐつたり、鎖骨に吸盤のキスを降らせたりして微調整。

「いいいいイクッ！ む、胸イク！ イクイクイクッ！」

「……胸だとありきたりですね」小鼻の膨らんだ女顔を引きよせて、「……オッパイにしましょうか？ この館ではオッパイと言うんです、いいですね？」

「はいっ、はいいい！ お、おっぱいいイツちゃう！ イツちゃう、イクウ！」

「誰のオッパイなのかも、キチンと告白しましょうね」

「ああっ、わ、私い！ 私のおっぱ……あああああ！」

乳房の付け根を、思いきり締めあげられた。

「誰のですか？」

「八雲！ や、八雲のおっぱいです！ 八雲のおっぱいイクウ！」

自分ではなく第三者に、全身ではなく部分に。当事者感覚を薄められ、頭と身体を乖離させられる。絶頂は全身の精力を濫費するおそろしい運動なのに、何の気がかりもなく大盤ぶるまいしてしまう。ふつうだったら絶対に口走らないだろう猥語や痴句も、全身の汗と同じであっさり吹かされる。

「その調子です……ふふふ、どんなオッパイですか？」

「ああ、うあああ！ や、八雲のオッパイはおつきいです！ 感じやすい、感じます！」

「つまり、いやらしいんですね」

「そうです、そうなの！ あああ、八雲のオッパイは、いやらしかったの！ そうよ、オッパイがいやらしかったのよお！」

「ええ、だから鍛えなければなりません……特に、ここあたりは念入りにね」

たがいに覇を競いあっていた粘膜たちが、珍しく統一行動を取ってきた。ルビーの兜をむしり取り、ガチガチに痾りきった乳首をくわえられた。粘液のヌメリ、粘膜の密着、吸盤の獐猛さ、人外ならではの責め苦で炙られた。

八雲は泣きだしていた。

乳首が気持ちいい、気持ちよすぎてどうしようもない。無力感にうちひしがれる子どものように、さめざめと泣き続ける。泣きながらイキまくる。

「……うああ……いく……八雲のちくびい……乳首イク……イクイクイクイク……」

涙の堰といっしょに尿のそれも切られて、乳吊りされた女はゆるゆると漏らした。内腿から膝まで洗うように垂れながし、金色のクロスに同色のシミを広げた。失禁すら気持ちよかった。乳首の性感が肩胛骨を砕きかねない威力と化して失神しかけたとき、やっと解かれた。テールブルのうえに優しく寝かしつけられた。

「……………おっぱい……ちくびい……ビクビクしてる……ああ、とまらない……」

絶頂を溜めこんで腫れあがった双乳は、ルビーに代わって愛撫の痕で赤く飾られていた。股間は脱力ゆえのガニ股で、太腿の紅潮と恥叢の濃さがいやでも対比されている。全身香油を塗りつけたようにヌメ光り、牝の生臭さを漂わせている。

「では忍さん、美貴。相槌をお願いします……」

牝奴隷たちが主人のそばから離れ、左右に陣取った。後輩は三方から囲いこまれていた。シャドウが天井灯を消し、燭台に火を付ける。テールブル上が密儀的な空間に早変わりする。光源の移動により、八雲の影が上座のあたりにわだかまる。淫魔は上下に押しつぶされたそれに手を伸ばし、人型の黒い紙をあつかっているかのごとく折りかえした。ちょうど胸のあたりだった。

「……かしこまりました。どれくらいふくれが出るのでしょうか？」

「膨大な量だと思えます。なにしろ……大きいですからね」

「まア、メス度に比例してるもんねー」

八雲には汲みとられない会話を交わしつつ、忍と美貴が手を伸ばしてくる。先ほどまでご主人様に包まれていた双乳に触れてくる。

「……うあ、あああ……あああ？ い、いやあ！」身を振って振りはらい、「いやっ、いやあ！ う、裏切り女^{もの}たちに触られるのはいやあっ！」

絶対悪はシャドウだけ、自分のいやらしさを委ねられるのはご主人様だけだ。

自分は紅薙姫、相手は淫魔。決して相容れない主従だからこそ、被害者の無責任に酔える。触手をくねらす人外の化け物だからこそ、人としての尊厳まで渡して隷属できる。

忍や美貴は自分と同類であり、その責めで気持ちよくなったら自分のせいになる。快感の純度が落ちる。それに自分は、この上司と同僚から罵倒された。魂鋼の絆も淫獄館のなかでは敵、シャドウの寵を奪いあう競争相手なのだ。こんな女たちに感じさせられたくない。絶対にイカされたくない。

「八雲……」口調は優しく、視線は冷たく。「これは鍛錬です」

「……うう、ううう……くううう……」

八雲は泣きながら唇を噛みしめた。色が変わるまで噛み、両手を頭のうしろで組んだ。背を反らし、横になっても流れない奇跡の双乳を突きだした。

「……す、好きにしなさいよ……」

「うわ、なにそのタメ口？ アタシらが好きでこんなエロ乳触るって？」美貴は、右乳に平手を喰らわせた。「これがバカみたいにエロエロだから、さしものご主人サマもおなかいっぱいモウ食べラレマセンデスヨでアタシらに回されてきたんじゃない？」

「うう……鍛錬……鍛錬お願いします」目元のホクロを痙攣させて、「く、悔しい……」
「そうでしょうね。売女と罵った相手に売られているのですから」

「……くッ……あなたたちに……あなたたちなんか、何をされたって絶対……ッ！」

「心中お察ししますよ……」忍が両手の輪で、左乳を縊りだした。「しかしまあ、本当にすごいですね。両手でも持てあます大きさなのに美形、ツンと立って張りがある……」

「お肌はスベスベ、お肉はモチモチ！ 先っぽボッキは超ギンギン！ ……なんてゆーか、巨乳フェチのロマンそのものみたいない？ あー、アタシ改心。アンタって、カワイソウなヒトだったのね？ こんなのブラ下げてたらどんな女だってマゾになるわー」

「く、悔しいっ！ 悔しい悔し……ひいっ？」

忍の手つきは陶芸教室の生徒で、美貴は雪ダルマを作るガキだった。お試し感まるだしの愛撫に指針らしきものが現れ、八雲の乳首を息ませた。

「ふふふ……どうしました？ 口に出すのも憚られるような表情になっていますが」

「ひあ、あ、あああ……なに、なんで？ どうして、こんな……」

胸の芯で流動感が煮えたぎっている。

これに比べれば、運動強度がもつとも高い四〇〇メートル走の直後ですら火花だ。粘り

つくマグマが、頭頂部めがけて迫りあがってくる。乳暈の裏を舐められて、なぜか喉まで干上がられる。まだ■かった夜、おねしよで目が覚めたときの気分。自分が途方もない醜態をさらしてしまいそうな予感に囚われる。

「……あなたの影がどうなったのか」折りたたまれた影は、シャドウの手が離れるやいなや元に戻る。それを再び折りかえしつつ、「忍さんから教えてもらいましたね？ いまままでは、八雲は淫らな気分になるだけで影に犯されます……望むところかもしれないませんが、八雲には紅薙姫として精の強さも保っていたただかなくてはなりません」

牝奴隷に墮としても女戦士のフリはさせ続ける。殻は残して中身だけを吸いとり、中身の虚ろさを糊塗するためにも積極的にサポートする。忍の斬魔数歴代3位は、忍がそれだけ貪りつくされたという証拠だ。隷属の深さを示すパロメーターなのだ。

「それで、あのヒトデたちなどを使って、八雲の双乳を造りかえたのです」

「あああ……じゃあ、じゃあ最初からなの？ 八雲がここに来たときからあ……」

このような奴隷に墮とすつもりだったのか。

「もちろんです。八雲が墮ちるのは運命でしたからね。ゆっくりと時間をかけて、影と双乳を繋いであげたんです……八雲は、双乳で潮を噴くんですよ」

「……おっぱいで、潮噴きする……」

「八雲が感じたり、いやらしい気持ちになったりするたびに溜まります……お2人には、いま搾りだしてもらっているのです」

胸の奥で精妙な連繋の感覚が脈打ちだしている。首筋や脇腹の神経がその身に刻みこまれた機能を果たすべく、初めてながらも懐かしげにわなないている。着せられている宝石たちとはちがい、女性の乳房は飾り物ではないのだ。乳暈から先が醜いまでに膨れあがる乳首が熱くてたまらない。装填した対空砲ステインガーを見ている気分。乳房そのものが熱い。忍と美貴がたがいに目配せしあった。2人がいったん指を止め、呼吸を合わせた。

「……カウント3」「にー!」「1……」

鬼踊丸きようまると鬼五郎、重量のある日本刀をラクラクと取りまわす4つの手が、握力のありつたけを振りしぼった。

「……あああああああああああああああああ!」

男性の官能でいけば、初めて射精したときの衝撃に近似しているのかもしれない。ただこちらは二刀流であり、筋肉の蠕動にくわえて外圧も受けている。さらには魔改造により、ジョウロ状の噴出口を左右1つずつに集約されている。2本の2倍の十数倍、噴きだすミルクは白蛇のごとき奔流で、テーブルをハミだして青いジュウタンに降りそそぐ。水道の蛇口を勢いよく捻っているような音を立てる。濃厚なチーズケーキの甘みをくゆらす。八雲の双乳はバレーボールのサイズ、噴射は20秒の4ミリリットルなどでは終わらない。

「い、イクッ! い……イクイクイクイクイクウウッ!」

乳首の先から背中まですさまじい凝縮感に包まれる。自分が母乳を噴きだすだけの存在、血肉のある水鉄砲と墮した惨めに襲われる。それでいてミルクが出るのは、目もくらむほ

どの解放感だった。銃口となった乳首を内側から舐められるのはたまらない。この気持ちよすぎる拷問がいつまでも続けばいい。

「……すごい……母乳で絶頂に達している……」

「うっわ、一番搾りなのにまだ出るね……まだだよ……どんだけ溜めてたの、コレ？」

女だけに可能な噴水ショーは1分間ほど続き、八雲はつまり1分間イキ続けた。双乳は自ら吐きだした快感に白くまみれ、鎖骨のくぼみや谷間もびしょ濡れになっていた。

「くあ、はあっ、ふああっ、あああ、はああ……いッ、イッちゃった……八雲、おっぱい……あああ……おっぱい噴いてえ、イッちゃったあ……」

「淫乳いんにゅうです」シャドウは影をまた折りたたみながら、「次から噴きだしたもののことは淫乳と呼びなさい」

「……い、淫乳……なんて、いやらしい言い方……」

「仕方ありません、事実ですから」忍が再び搾ってくる。「子どもを産んでいないのに中身を噴いてまで女を自己主張したがるなんて、あさましいにもほどがあります」

「しかもソレでイキまくりだしー」美貴も負けじと搾ってくる。「ザーメンとタメ張る濃さと臭いだよ、コレ。美貴カンゲキ。こーんなコトだつてしちゃう」

忍はひたすら搾りだしに特化した指遣いだった。美貴は乳首を指の腹で摘み、ペニスを相手取っているみたいにシゴきたててきた。

「お、おっぱい！ 乳首い！ い、いい淫乳う……」両手を頭のうしろで組んだまま、首



を左右に振りたくる。長い前髪が宙を舞い、あちこちのアクセサリが金音を立てる。「イク！ い、イツちやう、イクウツ！ ……あああ、だめっ、だめなのお！ い、淫乳すごい！ すごいの、イキすぎるのお！」

「あら、悔しいのではなかったのですか？ わたしたち売女に何をされたって絶対……」「ちがうよ、忍サマ。それはきつと、『どんなヒドいことされたって絶対にイキまくってやるう！』と言いたかったのデス」

「ああ、そうでしたか」乳搾りをやめ、冷蔵庫から牛乳ビンを取りだすように乳首を摘んだ。「では………マゾ牝の期待に応えてあげなければいけませんね」

濡れそぼった突起のコリコリとした弾力に驚いてから、まるで柄つき小鐘を鳴らす要領で振りまわした。

「あーっ！」

「あははは、ノドチンコまで丸見えー！ それエ、アタシもやるー！」

あわよくば房ごともぎとろうとしているような、滅多無性の狼藉だった。マゾの証とされた双娘は暴力的な刺激でさえ快楽と受けとり、被虐美を撒きちらす。遠心力のおまけを付けてのたうち回り、調教の完成度を訴えるかのごとくタパン、タパンと泣きわめく。裾野から乳首まで痙攣させて、ゾウの鼻みたいに淫乳を放ちまくる。

「ち、乳首ちぎれるう！ 乳首狂っちゃう！」

「おやおや、まだ狂っていないつもりだったのですか？ 陥没状態に戻れなくなったとき

から、わかっていたでしょうに……」

扁平になるまで潰され、1つしかない噴射路を封じられた。もちろん、肉の鐘あつかいは続けられたままだった。出口を失った淫乳が乳暈の裏を叩き、麻酔なしで心臓を引っつかれているような心地を味わわれる。

「だめえっ！」思わず後頭部から手を離し、忍と美貴の手首をつかんでいた。苦悦の枷を振りほどこうとした。「だめえ、は、離し……」

「八雲っ！」シャドウが腹に響く怒声を発した。「……鍛錬です」

「……ううう、あああ！ ああつ、あーっ！ 射したいっ、射させてえっ！ い、淫乳っ、八雲の淫乳噴かせてよおっ！」

「確か、わたしたち……あなたからひどい侮辱を受けたように思うのですが」

「ごめんなさいっ！ ば、売女なんて言っつてごめんなさい！ 八雲がっ、八雲のまちがいでした、八雲のほうで売女でした、おっばいマゾでしたあ！」

「おっばいマゾお？ ……あ、は……あははは、最高オ！ 八雲チャンたらとつてもクルル！ そのすばらしき『おっばいマゾ』っぷりに超リスペクトでエ、どちらかはリタイアしてア、ゲ、ル！ ……忍サマとアタシ、どっちに代わつて欲しい？」

究極の選択だった。八雲は死ぬほど悩んだあげく、「忍」と告げた。物理的な刺激はどちらも同じだが、忍から責められるのはより心理的なストレスを受ける。

「そ？ んじゃ、はい……忍サマ、ビーチクの根ツコをギユッとヤッてください」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



電子書籍も配信中!

ドリームガジン

2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



大人気PCゲームのコミック多数連載!



コミック UNREAL

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。